

中世私撰私家集と厭欣思想に就て

四回生無量正道

茲に厭欣とは穢土を厭い浄土を欣ぶの意であつて、具

さには厭離穢土欣求浄土と云う。即ち三界六道は衆苦充滿し、罪惡多き穢土であるから之を厭離し、浄土は快樂安穩にして眞実清浄の境界であるから之を欣求すべきを

云うのである。浄土宗では厭欣の心を以て總安心とし、

三心を別安心とするのであるが、宗義の中で重も肝要とする安心に總別安心があり、厭欣は總安心の一分である。そこで此の厭欣の思想が法然上人立教開宗以後の中世に作られた和歌集にいかに現われているのを見ようとするものであるが、ここでは紙面の都合で特に私撰私家集十一集を中心として考えて見る事とする。

先ず新古今時代の代表歌人は藤原定家である。俊成の子で四十三才の時父が世を去つた後、一代の巨匠として尊重せられ、天福元年（一二三三）出家して明静と云い仁治二年（一二四一）八十才で歿した。家集に『拾遺愚

草』三巻と『拾遺愚草員外』二巻とがある。

その歌風は新古今調を最もよく代表して而も中正溫雅である。無常、法門、釈教等信仰告白のもの凡そ九十首中厭欣の歌は左の二首だけである。

厭離穢土

濁り江になおしも沈むあしのねの厭ふしのろしげきころかな

欣求浄土

思ふかな、咲き散る色をながめても、さとりひらけむはなの台を

定家と並んで名声の高かつた歌人は藤原家隆で家集に『壬二集』二巻があり釈教歌十八首中より二集拾つてゐる。

私の家にて四十八願の歌人々に觀進せし時春庵長寿の心を

さまざまに變る姿をしたかつて、頼む光に消ゆるよもな

く天王寺繪堂前大僧正つくり立てて後の障子に九

品往生人かかれ侍りける時中品下生の人の心を

捨てやらで子を思ふ鹿の知るべより狩場の山は厭い出で
にき

定家、家隆以外の歌人には後京極摂政良経、其の叔父
の慈用（慈鎮和尚）、歌学で有名な頭昭法橋等があつた
が良経の家集『月清集』には釈教歌二十首あり、十界を
読めるもの十首、十如是十首あるのゝで法然上人に帰仰
し絶大の浄土教信奉者である関白兼美を父に持ち慈鎮和
尚の姪であつた良経ではあるが浄土教に親近の人ではな
かつたらしい。

次に『拾玉集』であるが作者慈鎮和尚は勅修御伝によ
れば「一乗円頓の戒をうけ、散心称名の行をぞ崇重せら
れける」とある様に四度天台座主であつた和尚は又法然
上人に帰仰の念仏者であつたと見られる。卷一に厭欣の
和歌一百首巻六に一百首と合せて二百首収められてある
阿彌陀仏と一度唱へて睡まむ、やがて誠の夢ともぞなる
法然上人の御詠、阿彌陀仏と十声唱へてまどろまんが
きねふりになりもこそすれ、は、この歌の本歌取と見

る。

何となき国ささびまで契りける仏の御名は南無阿彌陀仏
六六家集の一つ俊成の『長秋詠草』には厭欣の歌は一首
も見る事は出来ない。

西行の私家集『山家集』を次に見るに作者西行は俗名
を佐藤義清と云う、若く北面の武士として鳥羽上皇に仕
侍していた。二十三才の時、愛する妻子を捨て遁世した
のであるが、その後は修験者に随ひ熊野入をしたり、放
浪行乞の身となつて関東え下り行く等、色々と苦難多い
托鉢行脚の月日を重ねた人で、その信仰体系ははつきり
していないが歌集中には法華経中心のものが多く厭欣
意を寓したものに左の二首がある。

暁の念仏ということを

夢さむる鐘のひびきに打ちそへて、十度の御名を称へつ
るかな、易往而無人

西え行く月をやよそに思うらむ、心に入らぬ人のために
は

詞書に易往而無人と大経巻下の聖句を引用した両行は
法華経の行者であると共に又念仏行者であり浄土欣求者

であつた事を知る。又此の時代、三代將軍源実朝の『金塊集』がある。無常厭世の作や感傷的な歌が多く見られるがこれも絶えざる不安と苦悩があつた為であるうが、厭求浄土と云つた来世を欣求する意の歌は一首も見当らない。

以上で中世前期即ち北条氏の滅亡以前の百四十年間中の私撰私家集に當つて見て特に目立つ事は浄土欣求と云つても乱世を逃避する方便にと云うような方面が多い。

元弘三年（一三三三）と云えば元祖滅後百二十余年浄土教弘通盛んであると見られるが案外歌集には現われていない。北条氏滅亡以後の歌集には浄土三部経、善導観経疏と云つた内容のもつものが多く見られ經典の細部にまで入り込んで来た事はそれによつても弘通の盛んになつて来た反響と見るべきであつて、以下後期の主なものを拾つて見る。

吉野三代五十年間の君臣の歌集『新葉和歌集』に釈教歌二十九首あるが多く法華經中心である。これも撰者宗良親王が元天台座主であつた為であろう。中に後村上天

皇の御製がある。

わがたのむ、西のはやしの梅の花御法の花のたねかとぞ見る。右の撰者の御家集に『李花集』があるが厭欣の歌は一首も見当らない。

『草庵集』の頼阿は二階堂下野守光貞の子で俗名を二階堂貞宗と云い兼好よりは十数年おくれて伏見天皇の正応二年（一二八九）に生れた。此の歌集は歌数実に二千餘首、うつ然たる一大歌集であり、二条家に於ては正風として貴ばれた。釈教歌四十首、中で浄土教に因めるものが半数その三四を拾うと

彌陀本願の心を

さりととも、わたす御法を頼むかな、芦分小舟さわりある身に門々見仏得生浄土

にじにこそついに入るなれ法の道かりにあまたの門はあ

れども安楽集唯有浄土一門可通入路

西へ行く道より外はいまのよに憂世をいづる門やなから

む阿彌陀經諸宝樹及宝羅網出微妙音譬如百千種楽

同時俱作

いまぞきく松ぶく風の音ならで末にことのしらべあり

とは宝池をよめる。

はちす咲くたからの池にうく舟のまず面影に浮びぬるかな、

頼阿は又浄土宗の七祖了誉聖阿と深き因縁関係がある彼はもと天台から仏門にはいり西山義を深草の良恵経空に学び、阿師より鎮西の本義を合えられたから頼阿の持つ念仏信仰はこの二師より受けられたと見る。又阿師は歌道を頼阿から学び『古今集序註』を作った程歌道に堪能であつたが、阿師の組織した五重相伝の形式が、頗る御子在家に伝えられる歌道伝授に酷似しており、又宗乗研究の上で貴重な書である『切紙十八通』の名は歌道口伝の上で『切紙十八通』或は『二十四通』等と云う語法組織をそのまま用いられたものであると見る。

室町幕府時代になると二条派は益々衰えて反二条派の歌人や歌学者が続々現われたが特に取り上げるのは見当らない。その内、『草根集』の釈正徹が上げられるが十五卷中経文部七十七首あるがその大部分がこれも法華経を読めるもので浄土教に因めるものは見当らない。

以上中世時代の私撰私歌集十一集の中より厭欣の和歌

首を抄出した。元より杜撰であるが凡そ此時代に出来た歌集の七八分通りは目を通して見た。これらの歌集に収められている所謂歌教歌には法華経を題材とするものが絶对多いのは平安仏教の名残りでてもあるうか。以上の歌集に集められた和歌の総数二万余首、その中釈教歌五百二十六首あり、これを大別すると法華経百五十首、しかもそれは題名又は詞書に、法華経何々品と、明示したものだけの数で、題名も詞書もないもので法華経を詠める内容を持つものを入れると、もつと数がふえる筈である。浄土教四十五首、他は金光明経、雜摩経、心経等の歌が多く、理趣分経等のものは見当らなかつた。そして禅家のものが一向に見当らないのは当時の文学が五山の僧によつて維持されておつた即ち五山文学時代であつたからではなからうか。

これらの和歌を通じてこの時代の仏教界を観る時に當時の仏教徒の求道精神は熱烈なものであつて、単なる顕密の徒とか、念仏行者というだけではなく深く各々の正依とする経論釈に喰い入つて居つたのに気付くのである。勿論当時の歌人と云えば、上皇、月郷雲客、武人、僧侶

等社会の上層に居つた者だけで、町人・百姓等の庶民の歌は一首もはいつていないから、其等の者の信仰態度はここで知る由もないが、現代人の持つ信仰態度に比すれば余程深く仏教を掘り下げて真摯な態度で教と取り組んで居つた事からうかがわれるのである。例えば歌の題材に、臨終正念・聞名欲往生・四十八願・九品往生・説是語時無量寿仏住立空中・觀經十三觀・定散等回向即証無生身・忙々六道無定趣・嚴淨国土皆悉觀見・往生論・永離身心悩等の語を出家ならぬ在家の仁が自由に驅使しているのである。

又以上の集に収められた浄土教に因める歌は教の上からではどの集も同じであるが、格調の上から見る時は、中世の初期に出来たものには浄土宗義の上でいう三種念仏の中の止觀の念仏、要集の念仏に近いものが多く時代が下るに随つて選択本願の念仏に近いものが多く出ていくのに氣付くのである。

本稿に於て歌を通じて厭欣思想の推移傾向を見ようとしたのは無理であつた。元祖の御法語に「本願の念仏は木こり、草かり、菜つみ、水くむ、たぐひごときものの

内外ともにかけて一文不通なるが、となふれば必ずうまると信じて真実に願いと常に念仏申すを最上の機とす」とある様に浄土門では下根下劣を正機とするものであるのに、其等の機根とは凡そ縁の遠い和歌を通して念仏弘通の過程を探ろうとしたのは恰も木によつて魚を求めようとする愚に類するものであつた。最後にこの稿は卒論の中より一部抜萃した事を附記する。